

# 少子高齢化社会にむけたニュータウンの都市公園の再生

三 浦 浩 之

(受付 2002 年 10 月 11 日)

## 要 旨

少子高齢化の進んでいる千里ニュータウンにある都市公園の利用状況を調査し、利用者が減少している要因を分析した。公園周辺で若年層が減少していること、公園が子供の遊び場としてしか認識されていないことが、利用者減少の要因であった。また、これら公園に対する利用者等の評価を、利用者の多い公園に対する評価と比較した結果、遊具と休憩場所の充実が公園の評価を高めることが判明した。公園再生には、公園を子供の遊び場から大人や高齢者も含めた全世代が楽しめる場としていくこと、公園周辺住民の変化とともに公園内の施設、配置、構成等を変容させ続けるという視点が必要であることを示した。

キーワード：ニュータウン、都市公園、子供、高齢者、遊び場

## 1. 研究背景と目的

千里ニュータウンは日本初の大規模ニュータウンであり、昭和45年の日本万国博覧会開催を機に広域交通の整備が急速に進展し、交通アクセスに非常に恵まれた立地条件の街となっている。その一方で、街開きから40年が経過して、居住者の高齢化と若年層の大幅減少が進み、今後、わが国の進んでいく少子高齢化社会にいち早く突入した街となっている。このため、ニュータウン内にある多くの都市公園は利用者が少なく、場合によってはかえって危険な場所となりつつあるケースも見られる。

わが国では政策により欧米の公園との比較を面積によって行い、公園という装置の尺度をその背景にある文化ではなく量でとらえてきたという指摘がある。このため、日本では都市装置の一部として成熟しないまま、欧米の文化に対する憧れから多くの公園を作ってしまう、その結果利用されなくなった公園が増えているという現状に至ったことが指摘されている<sup>1)</sup>。

公園に関わる中心的課題は整備建設から管理運営に移行してきており、ライフスタイルの変容にともなう利用の多様化と高度化への対応、市民参加の積極的活用などが重要であるこ

---

1) 白幡洋三郎：お上がつくる公園の時代は終わった，中央公論，中央公論新社 pp. 204-217, 1992.3.

とが指摘されている<sup>2)</sup>。また、公園は日常生活では得られない体験のできる空間であるべきであり、例えば幼稚園児にとって公園緑地は、園庭にはない樹林地、池等の水辺、土手等の起伏、芝生地・雑草地等の自然的要素とのふれあいを可能にするものである<sup>3)</sup>。

本論文では、まず、千里ニュータウン内の都市公園における利用者減少の要因を分析し、このような公園を、市民の誰もが利用したくなるようなもの、様々な体験の場としていくために必要な公園再生手法を検討した。とくに、これからの少子高齢化社会に向けて、子供たちと高齢者にとって魅力のある公園として再生するための要素を検討した。

## 2. 対象公園の概要

本研究では、千里ニュータウン（大阪府吹田市）に立地する佐井寺南公園、江坂公園、佐竹公園、津雲公園の4公園を対象とした。公園の概要<sup>4)</sup>を表1に、園内平面図を図1(1)～(4)に示す。また、各公園のイメージをつかむために各公園の風景を写真1～4に示す。これらの公園は、その立地条件および公園の構成と設備より次の3タイプに分類できる。

利用者減少公園	公園開設時と現在とでは、周辺住民の構成が大きく変化して、現在、利用者が少なくなっている公園	佐竹公園 津雲公園
再生公園	再生事業によって、多くの人が利用するようになった公園	江坂公園
新設公園	住宅地開発に伴って新規に開設された公園	佐井寺南が丘公園

表1 対象公園の概要

公園名	開設年度	公園面積	周辺居住者の平均年齢
佐竹公園	昭和39年	3.0 ha	41.7歳
津雲公園	昭和38年	3.1 ha	39.2歳
江坂公園	昭和44年 再整備平成8年	2.3 ha	37.2歳
佐井寺南が丘公園	平成8年	1.0 ha	29.8歳

- 2) 金子忠一：公園の多様化と公園運営の多面性，ランドスケープ研究，63(2)，pp. 91-93，1999。  
 3) 小谷幸司，柳井重人，丸太頼一：幼稚園児の自然とのふれあい空間としての公園緑地の役割に関する研究，第35回日本都市計画学会学術研究論文集，pp. 619-624，2000。  
 4) 吹田市公園一覧表，pp. 122-127，2000。

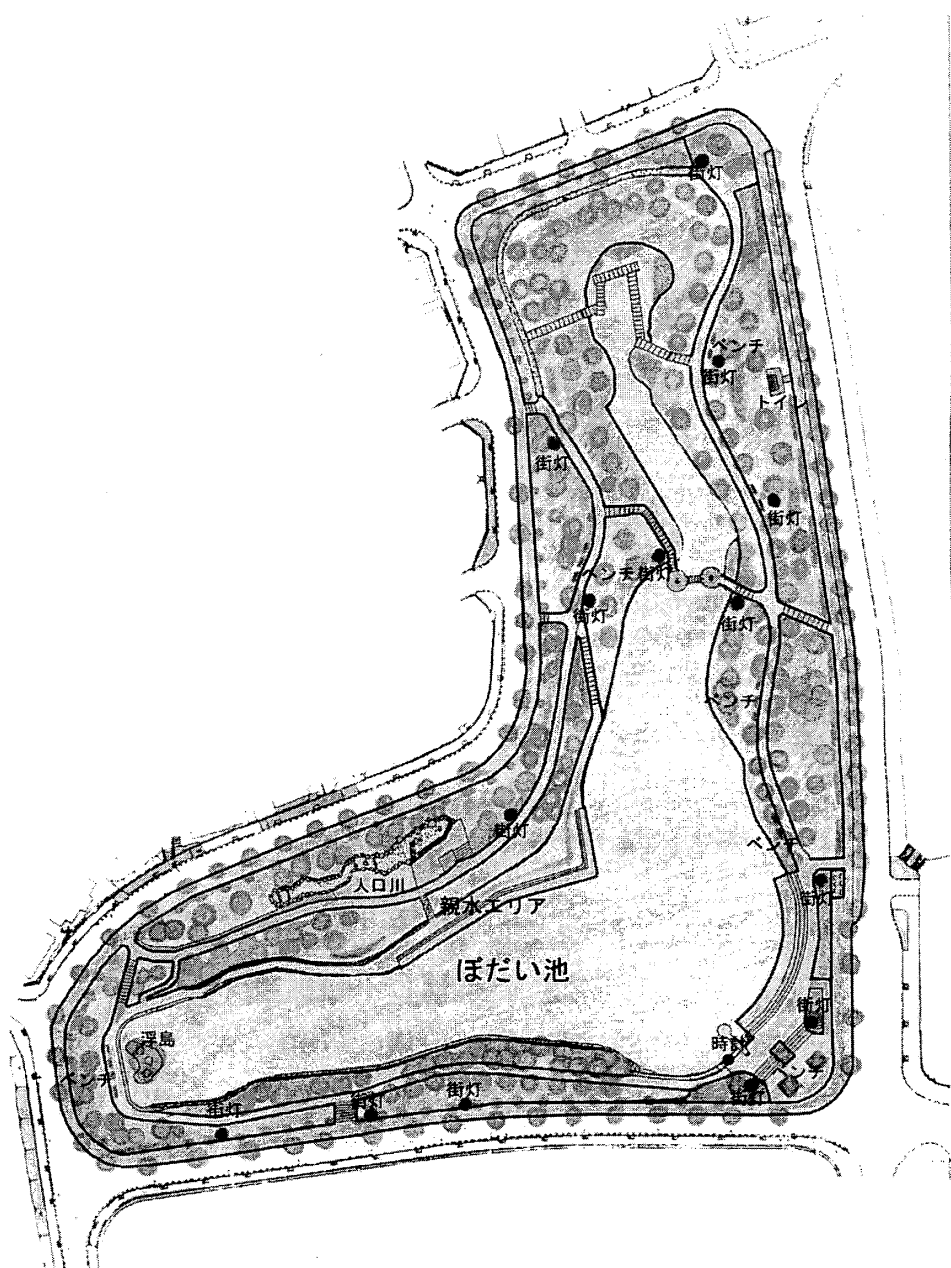


図 1 (1) 公園平面図 (佐竹公園)

### ① 佐竹公園

敷地内のほとんどが池で構成されており遊具がないという特徴をもっている。池の周りには遊歩道が整備されており石造りのベンチが並んでいる。池にはアヒル、カモ、亀など動物が多いが池の水質は良くない。階段などに一部スロープが備えられている。調査時は小雨のため人はほとんどみられなかった。

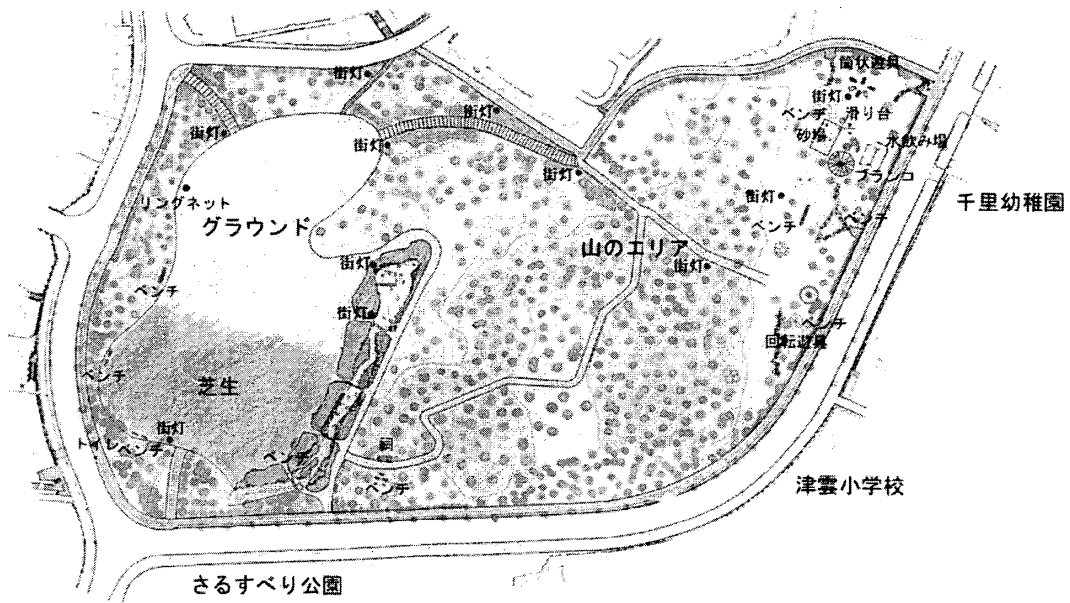


図 1 (2) 公園平面図 (津雲公園)

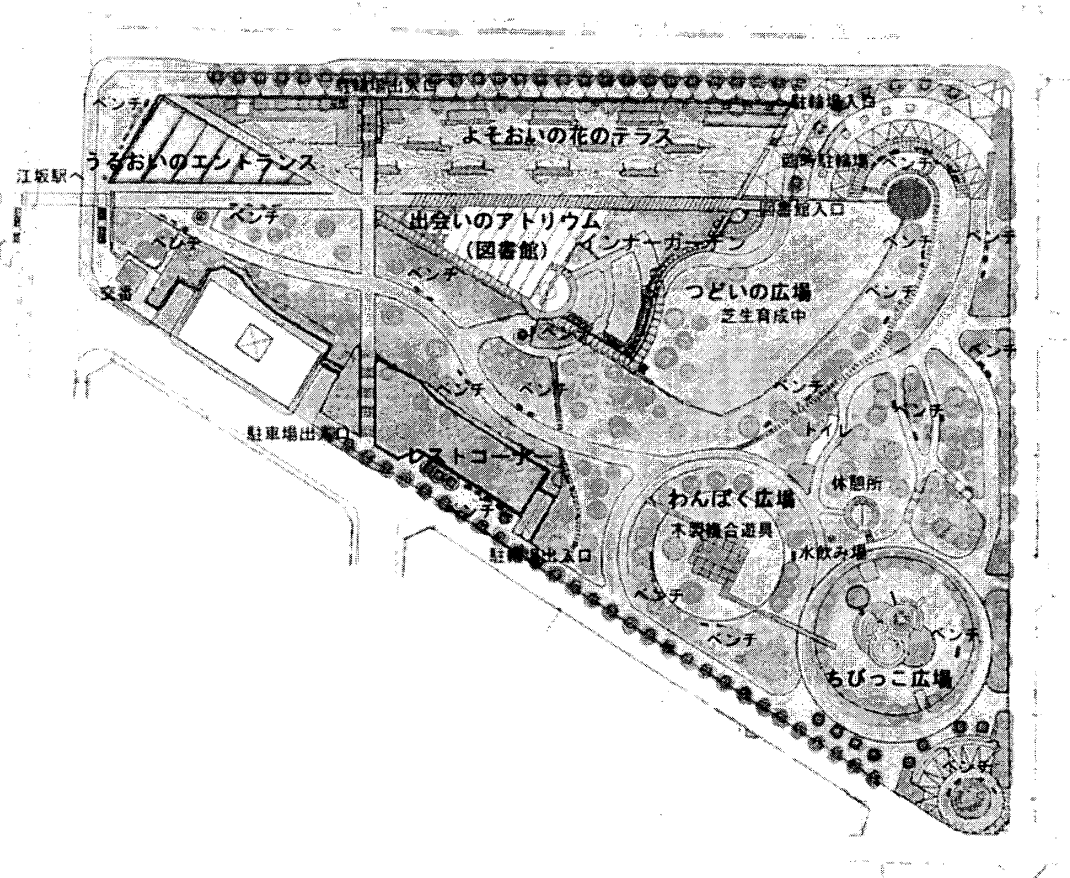


図 1 (3) 公園平面図 (江坂公園)

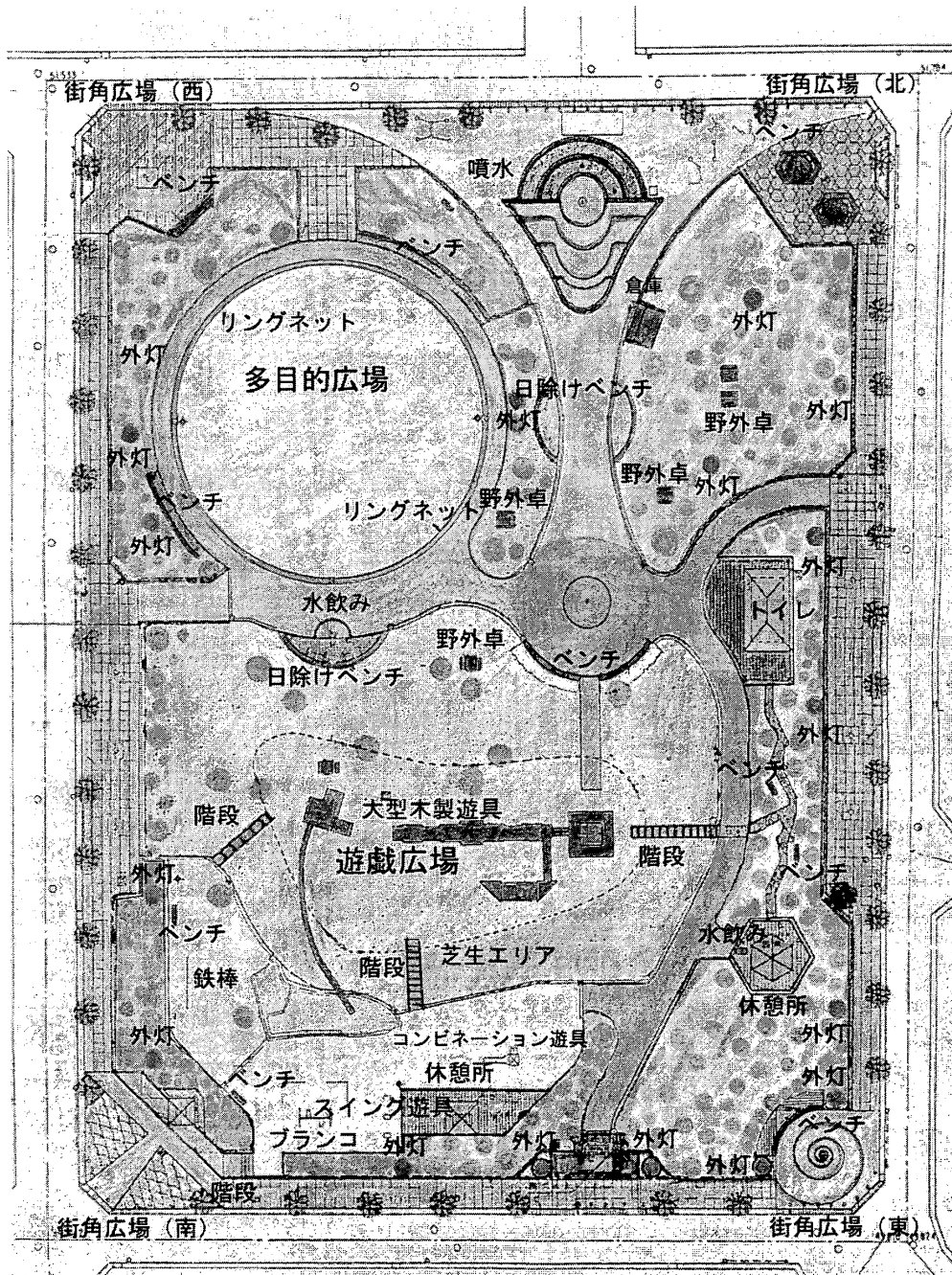


図1(4) 公園平面図(佐井寺南が丘公園)

## ② 津雲公園

大きなグラウンド・山・子供の遊び場所の3つのエリアで構成されている。現地調査を行った昼過ぎには、公園利用者はほとんど見られず、公園内にある水辺の環境も極度に悪かった。また、道路をはさんですぐ向かいにはさるすべり公園(街区公園)があり、隣接してある幼稚園・保育園には公園にある遊具と似た遊具が設置されている。

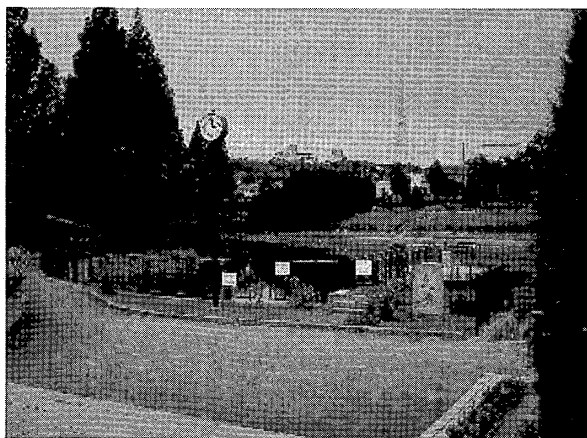
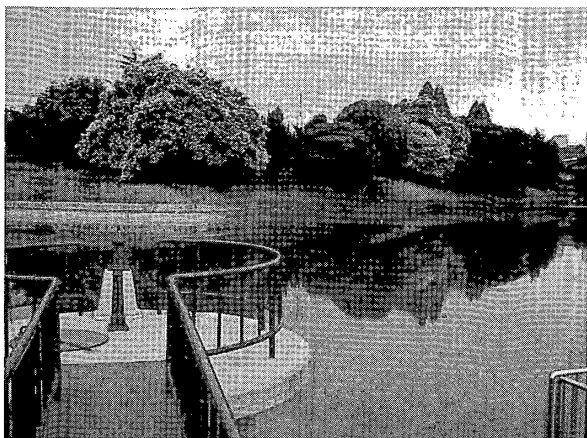


写真 1 佐竹公園

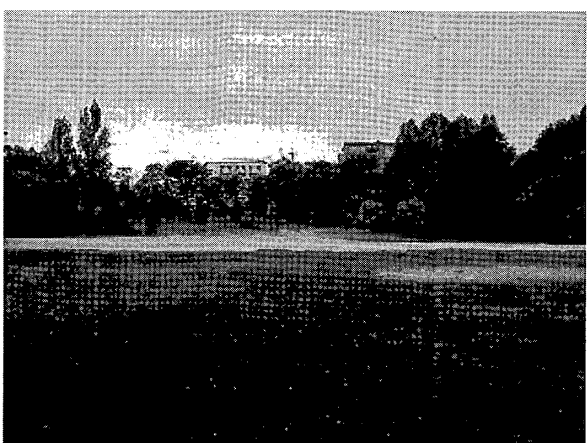


写真 2 津雲公園



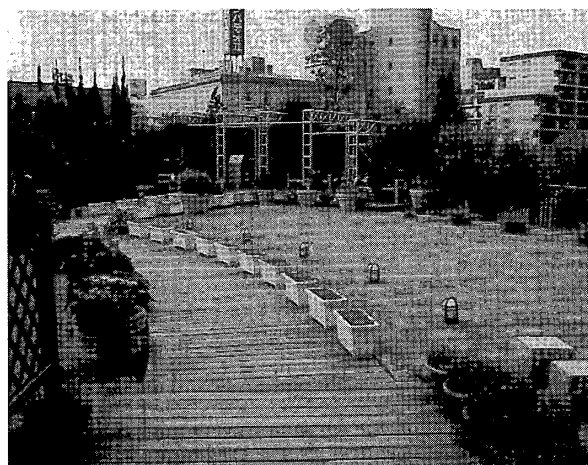
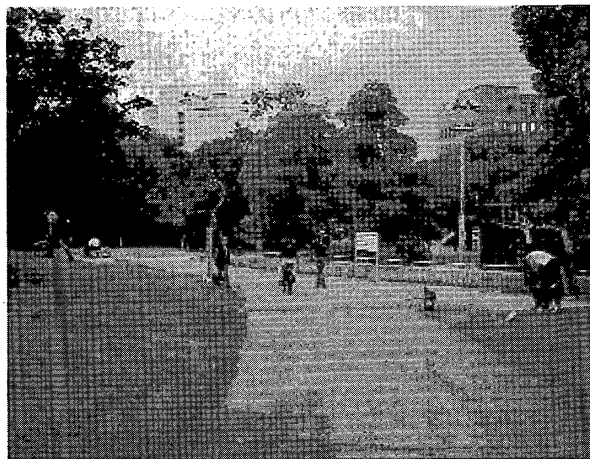


写真 3 江坂公園



写真 4 佐井寺南が丘公園

③ 江坂公園

オフィスなどが多い市街地のほぼ中心地に立地し、利用者が多い。公園内には図書館や、子供のための他にはないような遊具が設置されている。トイレもバリアフリー化されており、地下には市営駐車場がある。以前は暗いイメージの公園であったが、再整備が行われたことによって、手入れの行き届いたきれいな公園になっている。

④ 佐井寺南が丘公園

土地区画整備事業に伴って平成8年に開設された公園で、周囲には多数の新しい賃貸・分譲マンション等があって、若い家族が多く住んでいる。利用者が多く、特に遊具が充実しているため子連れの母親の姿が他の公園と比べて目立つ。比較的公園の維持管理も行き届いている。

津雲公園、佐竹公園は昭和34年に始まった千里ニュータウン計画で作られた公園である。当時の記録が示されている資料<sup>5)</sup>には、子供連れの家族の姿が多く、公園がにぎわっている様子が示されている。このことはヒアリング調査によっても裏付けられており、公園開設時には数多くの人に公園が利用されていたことがうかがえる。しかし、現在の津雲公園、佐竹公園は利用者が少なく寂れた雰囲気のパークとなっている。

以前の江坂公園は利用者の少ない公園であったが、平成8年に行った公園の大規模な再整備によって、多くの人々が公園を利用するようになった。公園再整備の成功例であるといえる。多目的利用、バリアフリーについての配慮もされている。

佐井寺南が丘公園周辺では近年宅地造成がなされ、賃貸マンションが多数建設されており、比較的若い年齢層の住民構成となっている。そのため公園は子供連れの親子が非常に多くなっている。この状況は、千里ニュータウン開発時の津雲公園、佐竹公園の状況に近いものである。

以下に各公園の特徴を挙げる。

① 佐竹公園

- ・ 千里ニュータウン計画時に開設された公園
- ・ 池を中心に構成されており、池周辺には遊歩道が整備されている。
- ・ 生物が多く生息する（アヒル、カモ、亀など）
- ・ 子供用の遊具がない

② 津雲公園

- ・ 千里ニュータウン計画時に開設された公園
- ・ 運動ができる広いグラウンドがある

---

5) 大阪府：千里ニュータウンの建設，大阪府，pp. 1-314，1970年。



- ・ ほとんど人間の手が加えられていない雑木林があり、自然的な要素が残っている。
- ・ 日陰になるベンチや東屋がなく休憩には不向き。

③ 江坂公園

- ・ 平成 8 年に再整備が行われた
- ・ 多目的利用、バリアフリーについての配慮がなされている
- ・ 市街地の中心でお昼休みに利用するビジネスマンや、親子連れ等、利用者は多様である
- ・ 公園内には図書館、植物園等の施設がある

④ 佐井寺南が丘公園

- ・ 平成 8 年開設の比較的最近できた公園
- ・ 周囲には新設のマンションが多数立地し、公園周辺住民の平均年齢が低い
- ・ 公園内容は遊び利用に偏っている
- ・ 公園利用者が多く、特に親子連れが多い

### 3. 公園利用の現状と住民意識

#### 3.1 公園周辺の住民構成

本研究では、アンケート調査から住民意識の評価を行った。一般的な公園誘致距離を考慮して、アンケートは各公園の利用者、及び公園境界から500メートル以内の周辺住宅地域で行った。対象者は小学生から高齢者まで幅広い年齢層となるようにした。回答者属性を図2～4に示す。佐井寺南が丘公園では30歳代が約40%を占めていることが特徴で新規開発地域で見られる年齢構成の偏りが著しい。また、江坂公園と共に30歳代以下で70～80%を占めている。一方、佐竹公園、津雲公園では半数以上は40歳代以上である。公園により周辺住民の年齢構成は大きく異なっている。

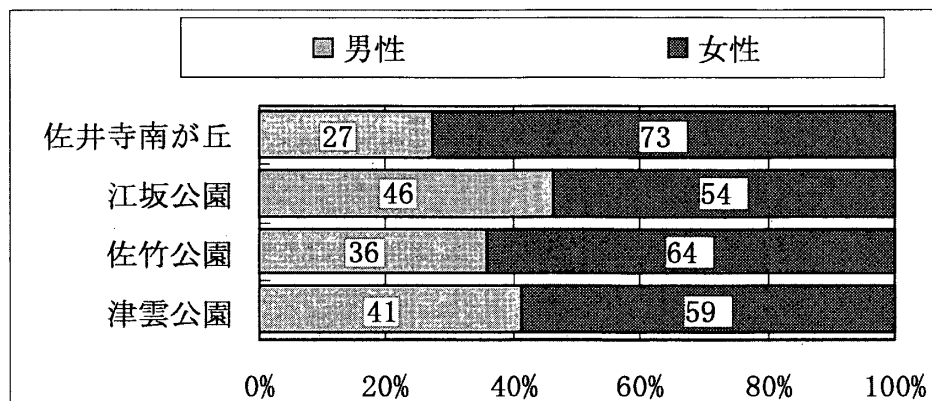


図2 回答者属性（性別）

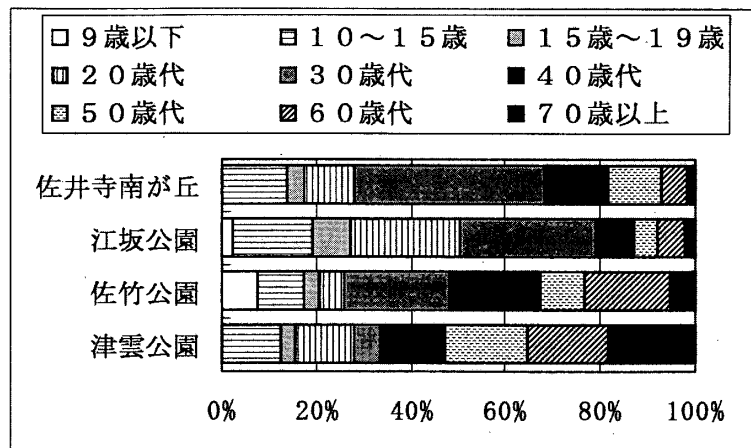


図3 回答者属性（年齢）

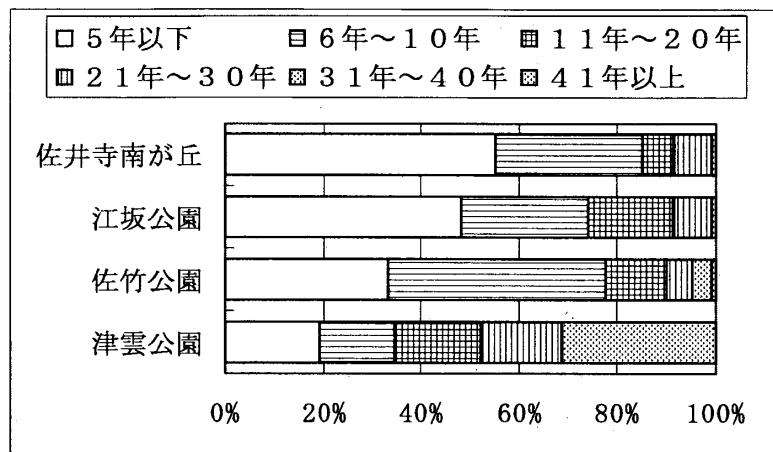


図4 回答者属性（居住年数）

次に、公園周辺住民の年齢構成を20年前と比較して図5に示す。佐井寺南が丘公園を除いた他の3公園では、公園周辺住民の低年齢層（9才以下）の人数が減少し、70代、80代の人数が増加しており、少子高齢化が進んでいることがわかる。佐井寺南が丘公園周辺は、土地区画整理後の多数のマンション立地によって、30代以下の人数が大幅に増加したことで、現在は比較的若い年齢層が多い。

### 3.2 公園の利用状況

各公園の利用状況を図6に示す。各公園面積に差があるため、利用者数を公園面積で除した単位面積当たりの公園利用者で比較した。佐井寺南が丘公園と江坂公園は一日を通して利用者が多く、佐竹公園、津雲公園はあまり利用されていない。

利用の多い2公園での利用状況を見ると、午前は10～11時頃、午後は14～16時に利用が集中している。佐井寺南が丘公園では、小さな子供とその母親の利用者が大半を占めており、

少子高齢化社会にむけたニュータウンの都市公園の再生

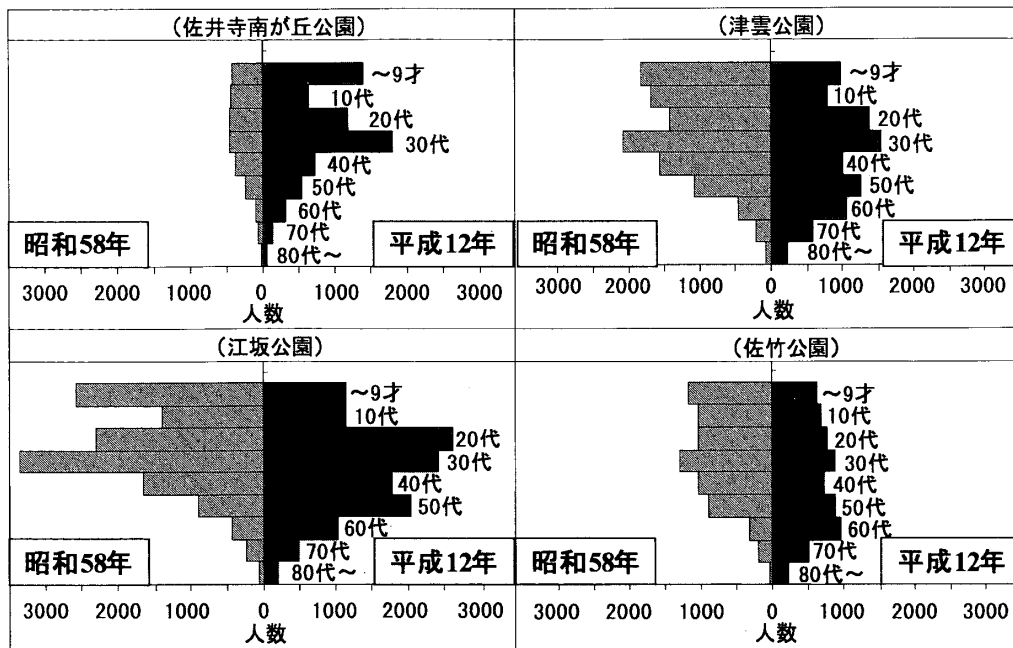


図5 公園周辺住民の年齢構成変化

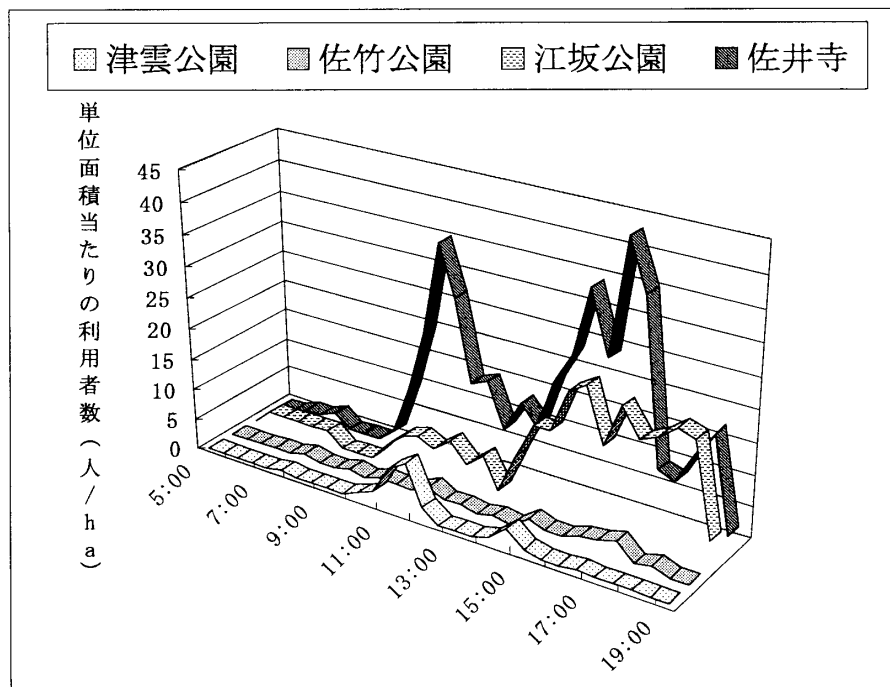


図6 単位面積当たりの公園利用者数経時変化

江坂公園では会社員や学生、子供とその親等、様々な人に利用されている。また、佐井寺南が丘公園では、午前中は幼稚園入園前の幼児を遊ばせに来ている人が多く、午後は幼稚園児、小学生が多い。

### 3.3 住民の公園に対するイメージ

住民が持っている各公園についてのイメージを Semantic Differential technique (SD 法) によって分析した (図 7)。利用者が多い佐井寺南が丘公園・江坂公園においては、平均的に良いイメージの回答が多い。これに対して、利用者の少ない佐竹公園、津雲公園では「気持ちが落ち着く」、「景色が良い」、「樹木が多い」などの環境が整っているにもかかわらず、施設に関する評価が低く、アンケート調査時には、明確な公園の目的が見えないというような意見も聞かれた。

利用者の多い公園と少ない公園を比較すると、自然や安らぎに関する項目では、さほど評価に差がないのに対して、施設面では大きく差が生じている。

これらのことから、公園は「自然」や「安らぎ」といった気持ちを抱かせてくれる場所であるだけでなく、公園の提供する空間が「楽しさ」を提供する場、「楽しみ」を見つけることのできる場であることが必要である。

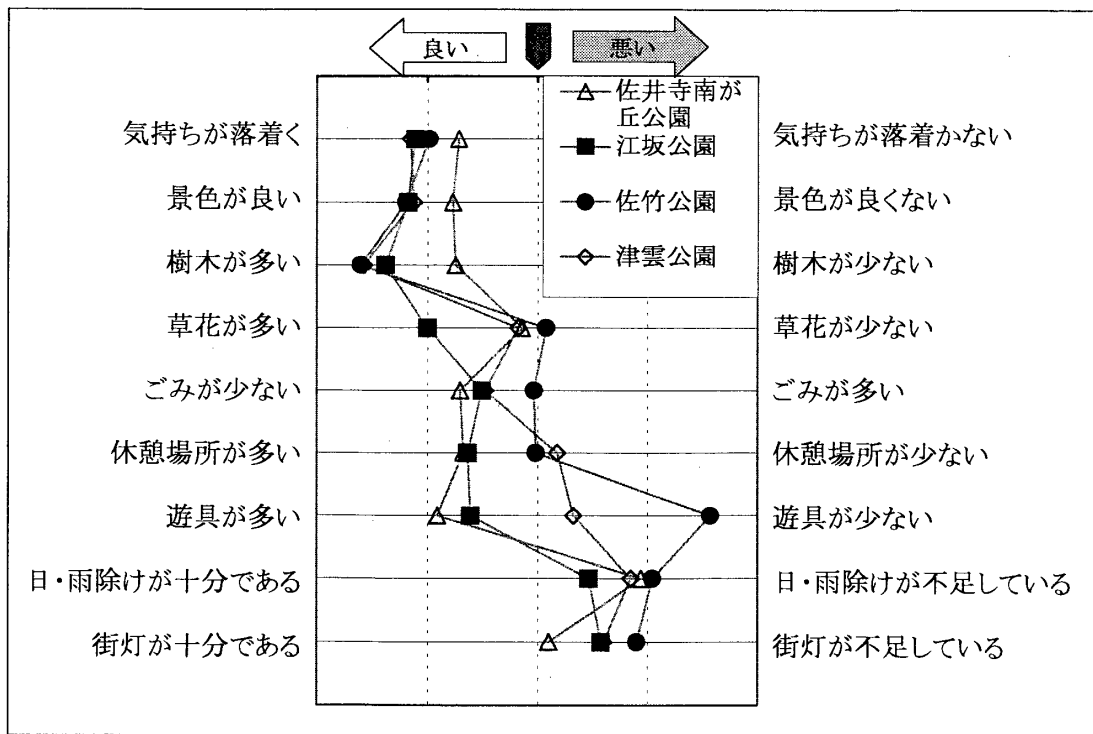


図 7 利用者の持っているイメージ

### 3.4 公園の不満点

公園の不満点について質問した結果を図 8 に示す。「トイレが汚い」の回答割合が高い。また「不良少年・不審者が集まる」、「街灯が少ない」というような治安面での心配が大きくなっている。開設時期の古い公園では施設面での不満点が多く、反対に新しく開設された公

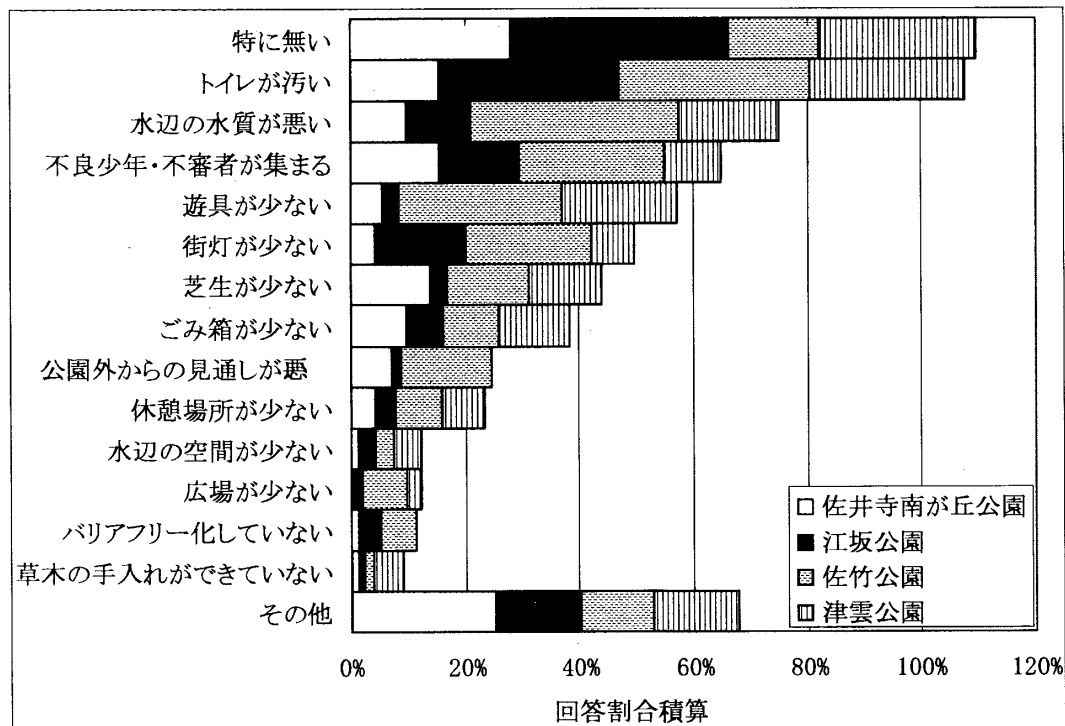


図8 各公園の不満点

園では公園利用者のマナー面での不満が多い傾向が見られる。

都市公園が若年層の溜まり場、青年犯罪の場と認識されていることがうかがえる。この傾向は新しく整備された公園で顕著にみられた。都市生活の24時間化に連動して、都市公園は夜間利用も行われることを前提に、公園内の安全性を確保する設計としていくことが必要である。

また、各公園には園内に池や小水路が設置されているが、その水質に対して不満を持つ人が多い。都市内では水辺空間に対する希求度が高いことから、公園内の水辺は手で水に触れる、足を浸すなどの親水行動が行えるレベルの水質を確保することが必要である。

#### 4. 住民が公園に求めているもの

都市住民が公園に対して何を求めているのかを検討することによって、利用者が減少している公園を再生する手段を明らかにすることを試みる。

##### 4.1 子供の遊び場としての公園

図9は全回答者の年齢と子供の頃遊んでいた場所（子供の場合は遊ぶ場所）とのクロス集計結果である。

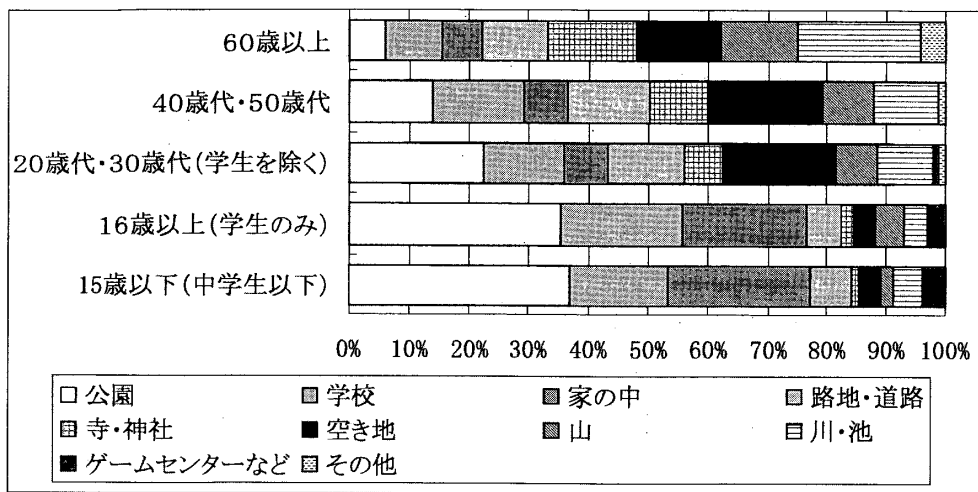


図9 子供の頃遊んでいた場所

いずれの公園でも、高年齢層の回答者は「川・池」や「空き地」などの自然空間を含めて回答が多様である。これに対して20歳以下の年齢層では自然空間を利用して遊んでいたという回答は非常に少なく、回答の70%~90%が「公園」「学校」「家の中」の3項目で占められている。特に公園は年齢層が低くなるに連れて公園で遊んでいたと回答した利用者の割合が増えている。

高度経済成長期以前の日本とは異なり、森林や原っぱのような自然のオープンスペースが減少していることから、子供が外で遊ぶ場所というものの自体が公園や学校以外にはなくなってきたという現実が見られる。このことから、現在の都市空間において、自然的オープンスペースとしての公園の重要性・必要性は、従来よりも高まっていると言える。

#### 4.2 公園を利用する目的

各公園の利用目的比較(図10)を見るとそれぞれの公園利用の特徴が読み取れる。佐井寺南が丘公園では「子供を遊ばせる」「遊び」を目的とする利用が非常に多く、他の目的についてはあまり利用されていない。佐井寺南が丘公園周辺地域には若い家族が多く住んでいることからこの傾向が出ている。佐竹公園や津雲公園では散歩利用が主な目的になっている。特に津雲公園では周辺に一戸建ての家が多くあることから犬の散歩での利用も多くなっている。しかし、公園全体が池とそれを囲む形の園路で構成されている佐竹公園に対して、津雲公園自体は遊具エリア、バスケットリングを備えたグラウンド、冒険心を掻き立てるような山のエリアで構成されており客観的に見て散歩に適した公園ではない。また周辺には高齢者が多く住んでいることから、現在利用目的に適した公園であるとは言いがたい。江坂公園は多目的な利用が行われており、合計の利用割合同じような割合になっていることから、比較



少子高齢化社会にむけたニュータウンの都市公園の再生

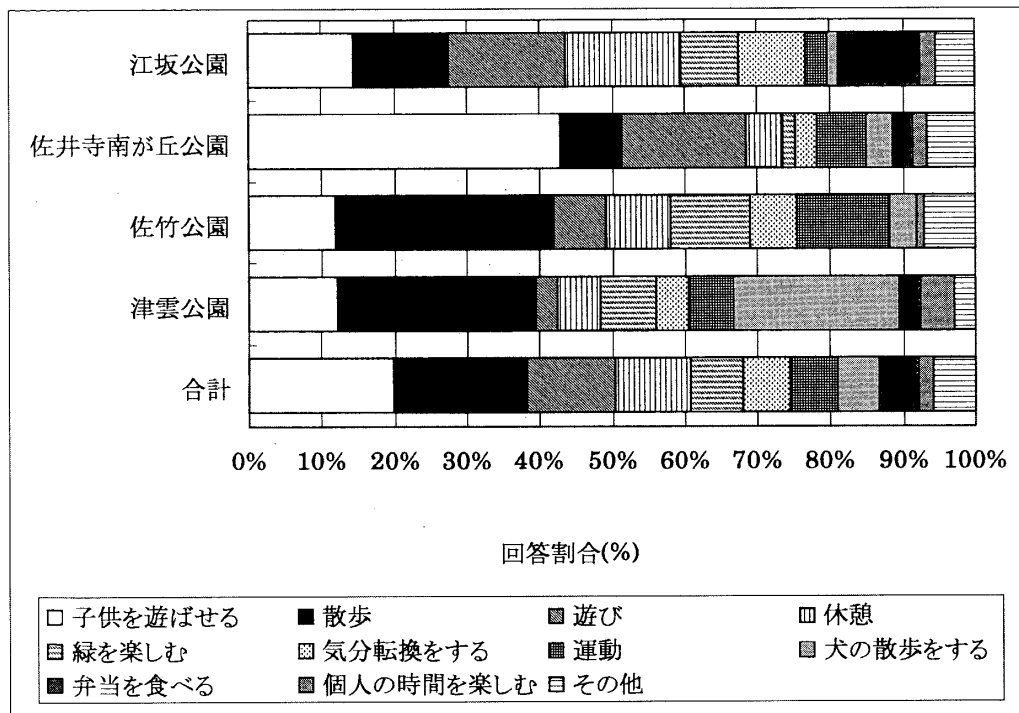


図10 公園毎の利用目的の比較

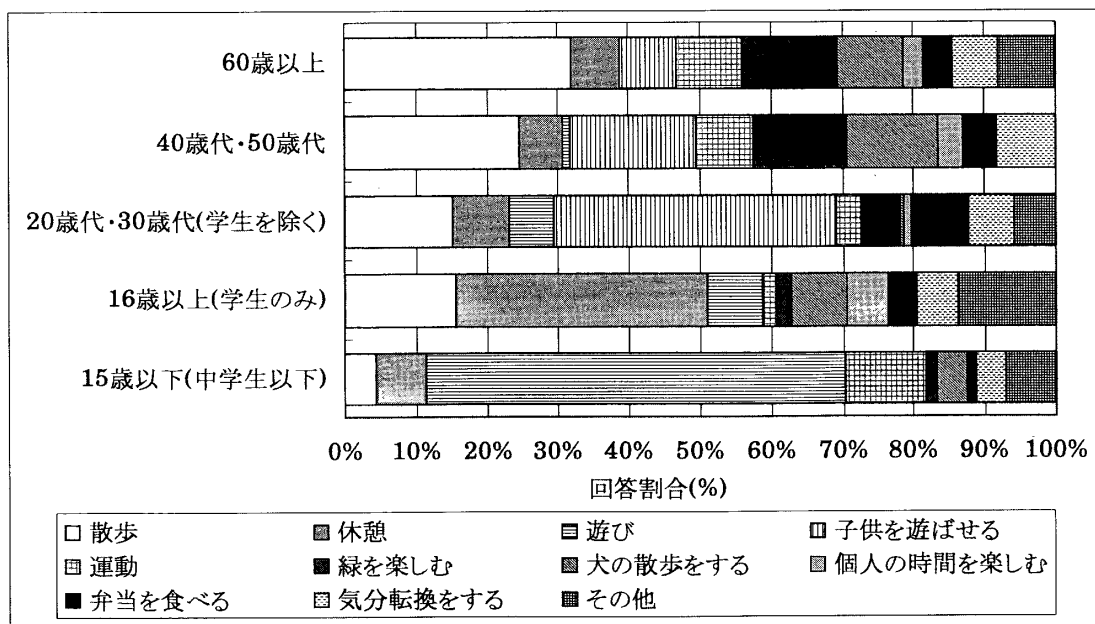


図11 年齢別の公園利用目的

的利用しやすくバランスの良い整備が行われている。

年齢別に利用目的を見ると（図11），年齢層ごとの利用目的とその変遷がはっきりと出ている。中学生以下の子供では遊びが目的の多くを占め，高校生・大学生の年齢層では休憩が

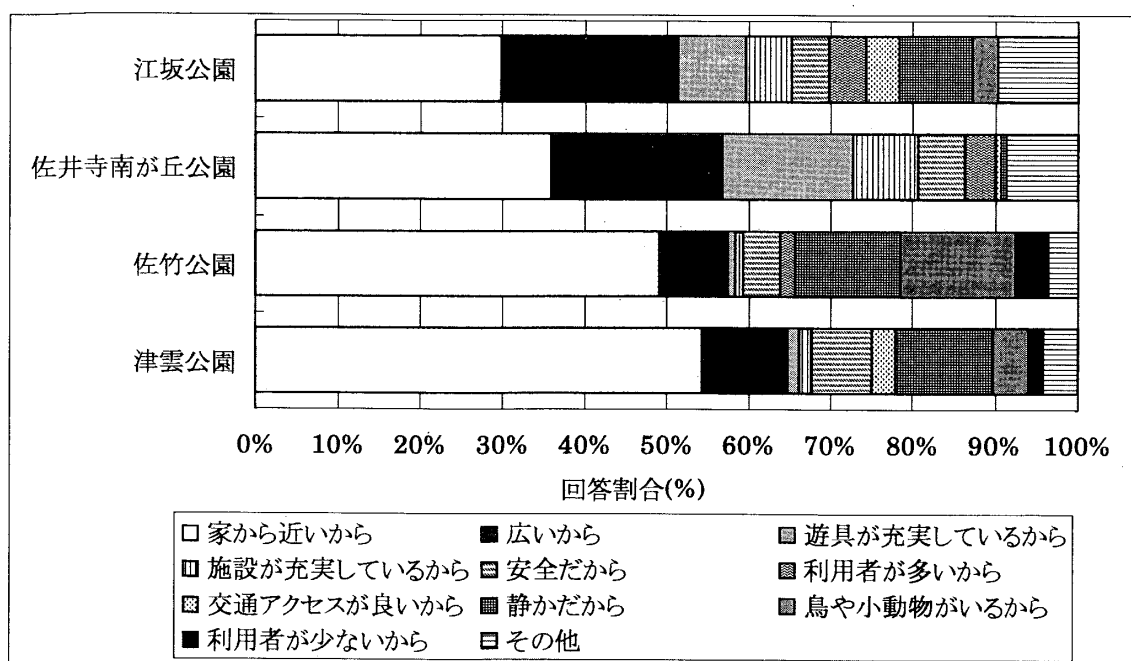


図12 その公園を利用する理由の比較

主な理由になっている。また、小さな子供がいる割合の高い20代・30代では子供を遊ばせるが主な利用目的になり、子供が大きくなってくるとつれて目的が、散歩へと移っていつている。

各公園において公園利用者に対して「なぜ他の公園よりもこの公園を利用するのか」という理由について質問した結果（図12）、各公園において利用理由の一番は「家から近いから」ということである。近隣公園の誘致距離が500メートルであることを考えると、住民が公園を利用する場合、最も近い公園を利用する、つまり「そこにあるから利用する」という感覚が強く、努めて公園に出向くという積極的な利用ではないということが伺える。しかし、それぞれの公園を比較してみると、「家から近いから」を選択している利用者の割合が、公園整備をしっかりと行い利用者も多い公園ほど低くなる傾向が見られ、公園も他の娯楽施設と同様に魅力的な整備を行うことでより積極的な利用を促すことができることがわかる。広いことも公園の魅力の大きなポイントになっている。

#### 4.3 公園を利用しなくなった理由

現在利用されていない公園を地域に親しまれる公園整備するためには、公園を利用している住民の意見を把握するだけでは十分ではない。そこで、次に公園を利用していない周辺住民を対象に、利用しない理由を調査した。

図13はアンケート調査の来園頻度で「以前は利用していたが今は利用していない」を選択した回答者に対して、その理由を質問した結果である。なお、この質問では、利用特性を考

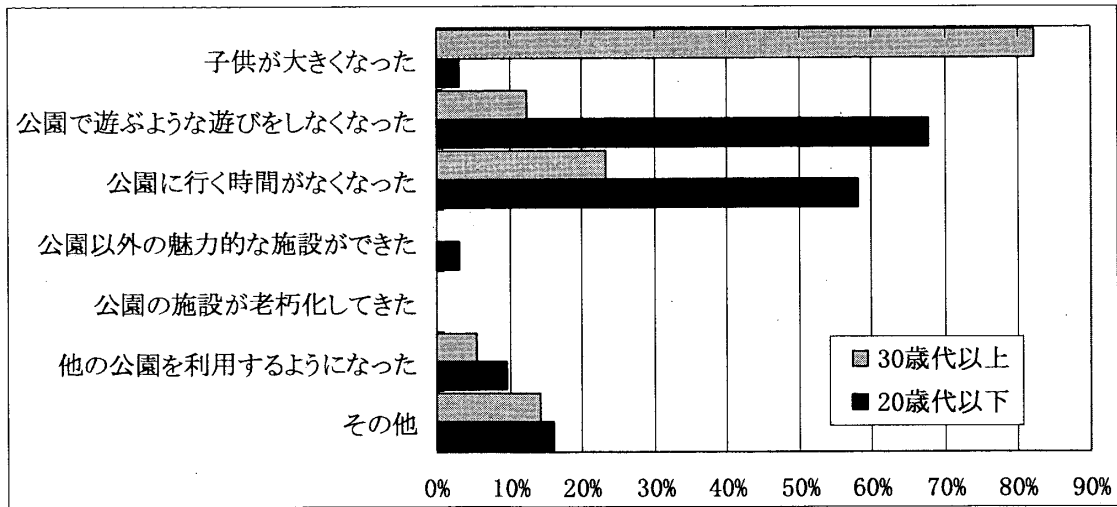


図13 公園に行かなくなった理由

慮して、回答者を「20代以下」と「30代以上」に分け集計した。

30代以上では「子供が大きくなった」、20代以下では「公園で遊ぶような遊びをしなくなった」という項目の回答割合が高かった。これは公園が子供の遊び場としてしか捉えられておらず、休憩やゆとりの場としての関心が低いことがわかる。これによって、子供の成長に伴い、住民は公園から離れていく傾向が示されている。

このような状況は、年齢別利用目的の解析で明らかになったように、中学生以下では遊びが目的の多くを占めているのが、高校生・大学生の年齢層では休憩が主な目的に変わっていること、小さな子供がいる割合の高い20代・30代では主な公園利用目的が子供を遊ばせることであるのが、子供の成長に伴って散歩へと移ることも示されている。

ニュータウン計画時には、津雲公園、佐竹公園の周辺にも、子供やその親が多く居住しており、当時これらの公園は多く人に利用されていたが、少子高齢化が進んだ結果、現在の利用状況に至っている。このように、公園開設時より、公園周辺の住民構成は変化しつづけるものの、それに対応して公園自体もその果たす役割を変化させてこられなかった結果、住民の求める公園像と実際の公園にミスマッチが生じ、利用されない公園を生み出したのである。

このことから、“公園＝子供の遊び場”という考え方を払拭するような公園整備が必要なのことがわかる。より多様な目的で公園を利用できるように整備していくこと、ゆとりの施設として様々な利用を促していくために高齢者や障害者が安心して利用できるよう安全性・利便性を高めることが必要である。

現在のところ、佐井寺南が丘公園は、周辺住民構成とこれによる公園に対して望む機能と、実際の公園の構成・施設がマッチしており、そのため、利用者も多い。しかし、津雲、佐竹公園と同様に数十年後には、公園周辺の住民構成が変化し、利用者が減少することが考えら

れる。

多くの人に利用され、地域に根ざした公園になるためには、住民構成の変化に対応し、公園を再整備する必要がある。少子高齢化が進む我が国では、遊び中心に整備された公園を様々な人が利用できる多目的な公園に再整備、リニューアルすることが必要である。また、今後新たに整備する場合も、再整備、リニューアルを念頭においた公園設計が必要である。

## 5. 少子高齢化社会対応のための公園再生方法

現在の公園は公園利用目的の大部分が遊びであるところまで述べてきた。これが、公園の利用性を狭めていることから、より多目的に、より多くの人が利用できる公園とするための再生方法を考察した。

### 5.1 住民属性変化に対応できる公園再生

千里ニュータウン計画の時代は、戦後の復興の時代には予想もできなかったような急激な変化を迎えている時期であった。節約、勤儉な思考から生活エンジョイ思考に変化し、レジャーという言葉が流行するなど家庭外でのレクリエーションやスポーツが盛んに行われていた。そういう時代背景から、公園など屋外での活動を楽しむことがゆとりであるという考え方もあり、多くの住民に利用されてきた。特に、若い人たちの間でも、公園がよく利用されており、公園が地域住民の生活の中で親しまれていた。

しかし、現在の公園では遊具のある場所に人が集まっており、小さな子供とその母親の利用者が大半で、近隣公園の規模を持ちながら大きな街区公園としての役割しか果たせていない。若い年齢層の住民の姿はあまり見られず、時折、散歩利用を行う高齢者の姿が見られる程度である。

公園と同様に、ニュータウン内の各地区に計画的に設置された近隣センターもかつてと比べると活気を失っている。住民の関心が地元よりも都心に向いてきていることが想像できる。

ニュータウン計画やベビーブームがあった数十年前と少子高齢化が進む現在では、住民属性の変動が大きく異なることから、これに対応する公園再生が必要である。

### 5.2 公園再生

#### (1) コミュニケーションの場

公園は遊び空間としての重要性・必要性が高いことを示したが、もちろん公園の役割はそれだけではない。公園に植えられた木々や草花などの緑や水辺の空間は、利用者の心を穏やかにし安らぎや休息を与える効果がある。そのほかにも、人の集まる場所となることで人と

人とのコミュニケーションの場となり人の輪を作り地域社会に貢献するという役割も持っている。しかし、今回調査した利用者の減少している2公園は、公園内の樹木が大きく生長していることもあって、閉鎖的な空間を構成してしまっており、このような役割を果たせていないのが実情である。地域に根づいた公園として再生して行くには、このような周辺住民のコミュニケーションの場として公園を再整備していくことが最低限必要である。

## (2) 本質的なユニバーサルデザインの導入

現在、公園の再整備は徐々に進んできている。福祉の町づくり条例などの影響も受けて、バリアフリー化なども進んできっており、江坂公園をはじめとしていくつかの公園の現地調査やヒアリング調査でも安全で利用しやすい公園に向けて整備されていることがわかった。

しかし、公園整備が必ずしも有効なものばかりではなく、住民にとって十分な満足を得られるまでには至っていないものも多く見られる。これは、バリアフリーならとにかく階段には手すりやスロープを付けるというような考え方で、実際の公園に適した方法の検討や利用者のニーズの把握が不十分なまま計画が進められているためであると思われる。

ハンディを持つ人々に対して特別に配慮して努力して設備の改善を行ったことが見えるような再整備や行政側がハンディのある人々に配慮して設備を設置したことを満足するための整備ではなく、あらゆる人々が普通に、気軽に意識することなく利用できる公園として再生していくことが大切である。

## (3) 住民参加

これまでの公園整備は、利用する地域住民等の意向を尊重しながらも、結局は行政主導で、専門コンサルタントとの協議を通じて進められてきた。公園は地域の住民が利用するために存在するものでありながら、その利用者の意見がなかなか取り入れられなかったのである。住民満足度の高い公園整備を行うためには行政側主導の公園整備では不十分であり、まず計画段階からの住民参加が不可欠となる。これまでは参考程度にしか捉えられていなかったが、ごく最近では、公園整備の計画段階から地域住民が参画して、その意見を取り入れるということが行われるようになってきている。そうすることで、公園に対しての愛着も育まれ、公園の管理・運営にも地域住民が積極的に参加するようになって、本当に地域に密着した公園としていくことが出来るのである。さらには、公園利用のマナーも良くなることも容易に想像できる。

しかし、住民参加と言っても実際にはごく一部の住民以外は、いつ、どこで、どのような議論が交わされているのかということを知る術を持っていない。それどころか、苦情をどこに出せばいいのかもわからないというのが現状である。市役所などの行政側は、市民相談所のようなものを設置しているのでそこに連絡すれば関連部署に話が届くという形をとっているものの、情報の公開や掲示があまりなく、そのようなことが行われていることさえ知らず

に過ぎしてしまっている住民も多く存在する。

現在では財政状況の厳しさ、公共工事発注に関する問題など様々な社会的問題が生じており、公共事業の目的、内容等の評価に関する関心も高まっていることから、行政と一般住民の距離をより近づける努力が必要である。

しかし、住民参加の課題として住民意見をどこまで取り入れるかということが重要な課題である。全ての住民に望まれる整備計画を立てるということは現実的には不可能で、必要であるにもかかわらず、一部の住民の反対により実施できない整備が多く存在しているということもヒアリング調査から把握できている。このことから、現在、広まりつつある住民参加もまだまだ未成熟な試みであり、これから住民と行政、および専門コンサルタントや研究者が一緒になってこの問題に取り組んでいくことが必要である。

## 6. ま と め

高度経済成長期以降の日本の公園整備では、“公園”と呼べるスペースの確保を重視してきたため、公園というものの本質を捉えきれておらず、もし現在の整備面積目標が達成されたとしても欧米のような豊かな文化施設にはならないかもしれない。また、公園の作り手が想像している公園の役割と使い手が求めている公園の役割にズレがあり、結果的に利用者の少ない公園を生み出し、かつ、治安の良くない場所を作りだしてしまっている。「量や形などの形式的なこと」ばかりが先行して「利便性などの質」がついて来ず、利用者である市民の意向を反映した公園となり得ていないというのが現状である。

一方、行政が努力して整備している公園に関する情報開示や PR は十分ではなく、実際に行われている有意義な整備活動も市民に認識されていないことがある。このことは公共事業全体に見られる傾向ではあるが、このことが結果的に事業に対する市民の賛同が得にくい状況を生み出している。

公園のような公共性の高い施設においては、今後の日本の少子高齢化に向けてお年寄りでも小さな子供や障害者でも同じように、それでいて楽しく使えるような新しい施設の整備に力を入れていかなければならない。これからの公園整備を考える上で、住民参加は不可欠であり、これを行うためにも住民に対する情報開示が重要である。

アンケート調査の結果、公園の利用目的では、全体的に「遊ぶ」「遊ばせる」などの遊びの利用が多いことがわかった。すなわち、都市内のオープンスペースが減少してきている中で、公園は子供が遊べる貴重な空間として意識されている。しかし、市民が公園の望むものは「遊び場」としての空間だけではない。地域の人々がコミュニケーションをとる場であったり、日常生活のストレスを解消する場、生活に豊かな彩りを与える場あったりする。従っ



て、公園再生では、休憩場所の配置やそのデザイン、散歩ルートにおけるストーリー性の付与、公園を前景とする景観デザインなど、様々な要素に配慮していくことが求められる。特に、現在の公園をあまり利用していない層（高校生や大学生など）にも魅力を感じてもらえる公園づくりを考えていくことが必要である。

現在あまり利用されていない公園が増加している原因として、テレビゲームの普及など子供の遊び形態の変化などによって、公園そのものの重要性や必要性が低下してきているのではないかということが考えられたが、現在と昔の子供の遊ぶ場所を比較した結果、現在都市内のオープンスペースが減少してきている中で、公園は子供が遊べる貴重な空間であると評価されていた。

地域住民とともに成長する公園をめざし、遊具のリニューアルや住民構成の変化にともなった公園形成要素の再編成等を行ってゆき、公園がより多くの市民に愛される場となることが大切である。

- 
- 6) クレア・クーパ・マーカス、キャロライン・フランシス：人間のための屋外環境デザイン—オープンスペース設計のためのガイドライン、鹿島出版会、pp. 163-168, 1993.
  - 7) 浅野房世、亀山始、三宅洋介：人に優しい公園づくり—バリアフリーからユニバーサルデザインへ、鹿島出版会、1996.6.
  - 8) 浅野房世：公園におけるユニバーサルデザイン、土木技術56巻4号、pp. 106-110, 2001.4.
  - 9) 大阪府：千里ニュータウンの建設、1970.3.
  - 10) 吹田市生活環境部緑化公園事務所：江坂公園パンフレット、1996.11.